

この投稿は、学会の見解を示すものではなく、投稿者の個人の責任においてなされたものであり、一切の責任は投稿者本人に帰する。

プロフェッショナル論と人生

2018年12月

下條 佑一

要旨

天然資源の少ない日本の国を支える力は勤勉に働く人である。一日長時間働く時代は終わった。これからは国民一人一人が今まで以上にプロフェッショナルを意識して力を発揮することが大切になる。その為にはプロフェッショナルとは何か、そしてどうすればプロフェッショナルになれるかを理解することが重要である。誰もが「その人らしさ」を活かしてプロフェッショナルになれる可能性はある。但し、その為には「その人らしさ」をしてプロフェッショナルな仕事をなさしめる為の技（わざ）を身に着ける必要がある。それによって国を支えるだけでなく、個人にとっては一生3万日の毎日を充実させ人生を楽しく豊かなものにする事も理論的には可能である。

キーワード：プロフェッショナル 人生全体でのプロフェッショナル

仕事でのプロフェッショナル 家庭でのプロフェッショナル 技（わざ） 稽古

Abstract

Under the special condition of very few natural resources, the power to support the country of Japan is people who work more and more professional manner to minimize loss of efforts. To do so, we must understand “What is professional?”, “How to be professional?”. Anybody has potential to be professional by full usage of gift for doing something. However, to make the gift accomplish meaningful output, it is very important to acquire skills to support it, because the gift alone could not do it in many cases. By doing so, we could support the country and also make each day of total life full and enjoyable for each individual.

Key Words : Professional, Professional at Total Life, Professional at Home, techniques, practices

目次

- 1 何故「プロフェッショナル」を真剣に考えるのか
- 2 「プロフェッショナル」とは何か
- 3 どうしたらプロフェッショナルな仕事ができるか
- 4 異力（いりょく）の凄さ
- 5 技（わざ）と稽古
- 6 サラリーマンのリスク
- 7 若者の自分探しの旅
- 8 プロフェッショナルお父さんお母さん(Professional at Home)
- 9 人生3万日の旅(Professional at Total Life)

1 何故「プロフェッショナル」を真剣に考えるのか

天然資源が相対的に殆んどない日本が世界トップクラスの繁栄を達成したのは何故だろうか。それは日本の国民が「よく」働いたからである。逆に言うと、このことが無ければこの国の繁栄は維持できない。「よく」働くとは、単に勤勉に多くの時間を働くことではない。何の仕事をするにせよ「プロフェッショナル」に仕事をするということである。全ての仕事に共通する「プロフェッショナルとは何か」を考え、「如何したらプロフェッショナルな仕事をするができるか」を考える。それが国の繁栄を持続するために必須である。また個人レベルを考えると、「プロフェッショナル」水準を満たせば、3万日の永い人生を楽しく豊かに創造し過ごすことに繋がる確率は高くなる。

2 「プロフェッショナル」とは何か

従って誰でも「プロフェッショナル」と言えるような人間になりたいと思っているであろう。ところが往々にして心の底から納得できる「プロフェッショナル」のイメージは必ずしも明確ではないのではないかと。故に「プロフェッショナル」のイメージを明確に描いておく必要がある。これから考える「プロフェッショナル」は必ずしも所謂「有名」である必要はない。実際、日本の国の繁栄を支えてきた人々の大多数は必ずしも有名ではない。プロフェッショナルとして先ず必須の前提条件は、したい仕事の領域を明確にもっていること。これは「志」ということができる。この前提に立ってプロフェッショナルのイメージを明確にするために3つ条件を提案する。

第一条件は、「仕事の結果が素晴らしい」ということ。仕事の結果が素晴らしいと判断する基準は、ある時は定量的に把握することができるが、定性的にしか認識できない場合も多い。例えば企業の場合、数値として売上・損益・収支・財務体質は定量的に測定できるが、社員がどれほど「わくわく」働いているかは、定量的には正確に測定できない。社員へのアンケートをとった場合、ある程度の数値情報は得られるが、それは社員の「わくわく度」そのものではなく、それを表す「代理変数」でしかない。また芸術家の仕事の場合は、ほとんどが定性的な評価しかできない。ある絵画を見た時に、人によって好き・嫌いは感じるができるが、その絵画が素晴らしいかどうかは定性

的判断の域を出られない。結論として、定量的であろうが定性的であろうが、結果が素晴らしいとは多くの人が拍手喝采してくれることといえる。これは自己満足ではなく他人の目での評価である。

第二条件は「手掛けている仕事が世の中に役立っていて、自分もそれに生き甲斐を感じる事ができる」ということある。これは他人の目による評価と自己評価の両方といえる。ここで注意したいことは、前記の第一条件は満足するが第二条件を満足しない場合があることである。例えば企業の決算数値が素晴らしいことが幾期か続いて、社長のプロフェッショナルの第一条件を満足したかのように見えていて、後日それが社会的に好ましくない行為のもとに得られた結果である場合、第二条件違反でプロフェッショナルとは言えない。こういうケースが後日露見した事件はテレビのニュースを賑わしている。

プロフェッショナルの第一条件と第二条件を満足すれば、プロフェッショナルと言えると考えられる。しかし、その仕事で疲労困憊したのでは残念な気持ちが起こる。例えば、検察庁長官職にあつて世の中の悪を退治する仕事は、立派な成果を上げていれば間違いなく第一条件と第二条件を満足している。しかしその仕事は緊張感とストレスに満ちた仕事で、決してリラックスしてワクワクできる仕事ではない場合も多いのではないかと思う。定年退職する時は疲労困憊状況にあつても不思議ではないのではないか。そこで、できればこう言うことを避けるための条件として第三条件を追加したい。それは「手がけている仕事がとても楽しい/ワクワクする、またはその仕事で死んでも悔いがない（死に甲斐がある）」である。こうするとその第一条件・第二条件を満たす価値ある仕事はきっと永続きするであろう。

この視点から分かり易い実例を挙げたのが表1と表2である。ここに挙げた人たちは高齢になつても活躍した/している人たちである。これらの人たちに共通していることは「自分の内なる力に突き動かされて」仕事をしていると思われる。そこにはストレスのないワクワク感があるように感じる。簡単にいうと「好きなこと」をしているということ。即ちプロフェッショナルの第一条件・第二条件を満足しつつ第三条件も満たしているわけです。

表1 シニアで(も)活躍した人々(ほんの数例)

ミケランジェロ (1475－1564, 89才)	ヘレン・ケラー (1880－1968, 86才)
アイザック・ニュートン (1642－1727, 85才)	コンラート・アデナウアー (1876－1967, 91才)
ジョン・ロックフェラー (1839－1937, 98才)	サンダース大佐 (1890－1980, 90才)
ヨハン・ゲーテ (1749－1832, 83才)	マザー・テレサ (1910－1997, 87才)
パブロフ・ピカソ (1881－1973, 92才)	

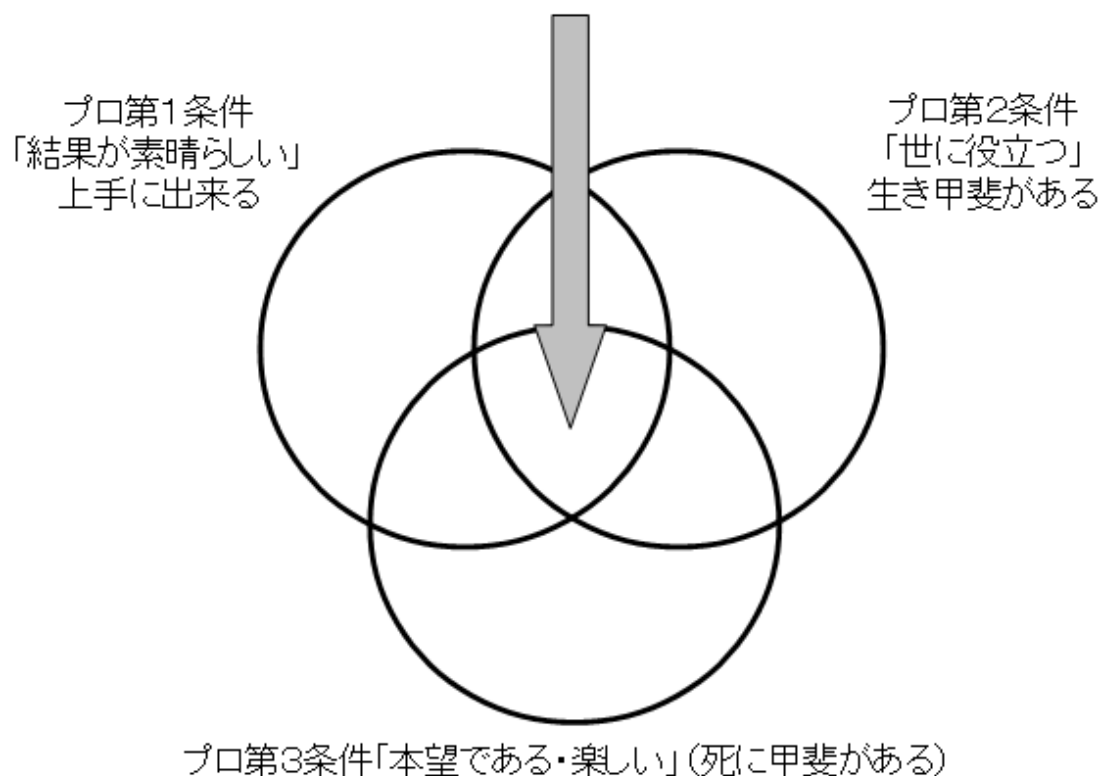
表2 シニアで(も)活躍した人々(ほんの数例)

塚原ト伝高幹 (1489-1571, 82才)	瀬戸内寂聴 (1922- 現在, 96才)
伊能 忠敬 (1745-1818, 75才)	坂田藤十郎 (1931- 現在, 87才)
葛飾 北斎 (1760-1849, 89才)	三浦雄一郎 (1932- 現在, 86才)
日野原重明医師 (1911-2017, 104才)	岸 恵子 (1932- 現在, 86才)
篠田桃紅 (1913- 現在, 105才)	大村 智 (1935- 現在, 83才)

2018年現在

プロフェッショナルの3つの条件と仕事の関係を図解すると図1のようになる。この図に於いて3つ円が重なる部分の領域の仕事が出来れば、それは理想的プロフェッショナルである。

図1 プロフェッショナルとしての仕事の選択



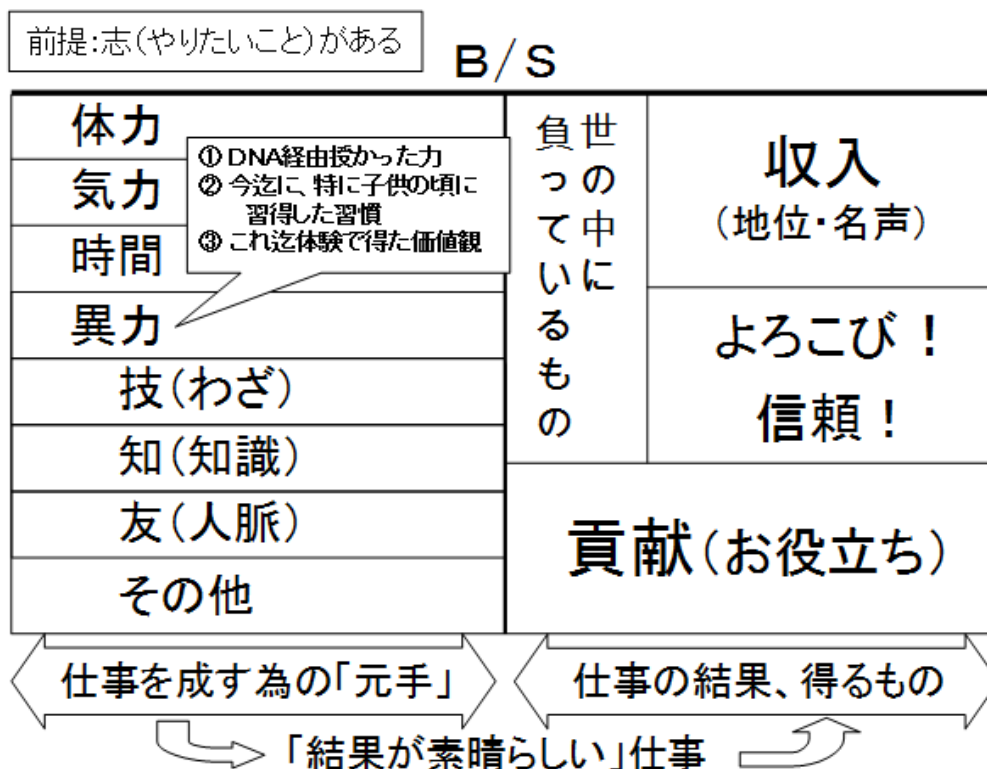
3 どうしたらプロフェッショナルな仕事ができるか

ここまでで3つの条件によってプロフェッショナルのイメージが出来上がった。次に、どのようにしたら、この3つの条件を満たした仕事ができるか考えることになる。単に一生懸命仕事をするだけでは結果としてそうなることもあるが、ここではどうしたら誰もがプロフェッショナルな仕事ができるようになるかを理論的に考えてみる。

このために財務諸表の一つである貸借対照表の型を利用してプロフェッショナルとしての個人のB/S（バランスシート）を創ると図2のようになる。この図を見るときの前提としてプロフェッショナルとしての志（やりたいこと）があることが必要である。その上でプロフェッショナルの第一条件である「結果が素晴らしい仕事」をするための元手が図中の左側に挙げた要素である。右側は成し遂げた素晴らしい仕事の結果として得られる事項を記している。

まずは「体力」である。即ちプロフェッショナルであるためには絶対「体力」を維持しなければならない。極端に言うと例えば、プロフェッショナルは大きく体調を崩してはならない。職場には最良の体調で赴くことが求められる。人は20代を過ぎると若さをもとにした体力は必ず下降に向かう。従って生涯を通じてよい体調を維持するための技（わざ）が必要になる。

図2 「プロ」としての「個人のB/S」



次の項目は「気力」である。仕事の結果が素晴らしく（プロフェッショナル第一条件）、それがまた世の中の為に役立ち、小さくとも人の役にたって喜ばれれば（プロフェッショナル第二条件）元気になり「気力」は向上し、その後の仕事の大きな応援力になる。但し仕事の結果に左右される「気力」では安定しない。そこでもう一步進めて「気力」を自分の意志で向上させることができれば、「気力」は仕事の結果を待つ前に自力で生み出せる。これを可能にするのが「気の技（わざ）」である

次の元手は「時間」である。自分がプロフェッショナルとして活動したい仕事に何らかの理由で時間が割けなければ、その仕事はできない。この意味からもプロフェッショナルは大きな病気を患ってはいけないのである。更に時間を量的に確保出来たとしても、その質的な生産性が重要である。例えば、仕事の過程で失敗が多発すれば時間の生産性は下がる。この意味から「時間の技（わざ）」は重要である。人の一生は限られた時間である。仕事に時間を使うとは命を使うことである故、これほど大切なことはない。

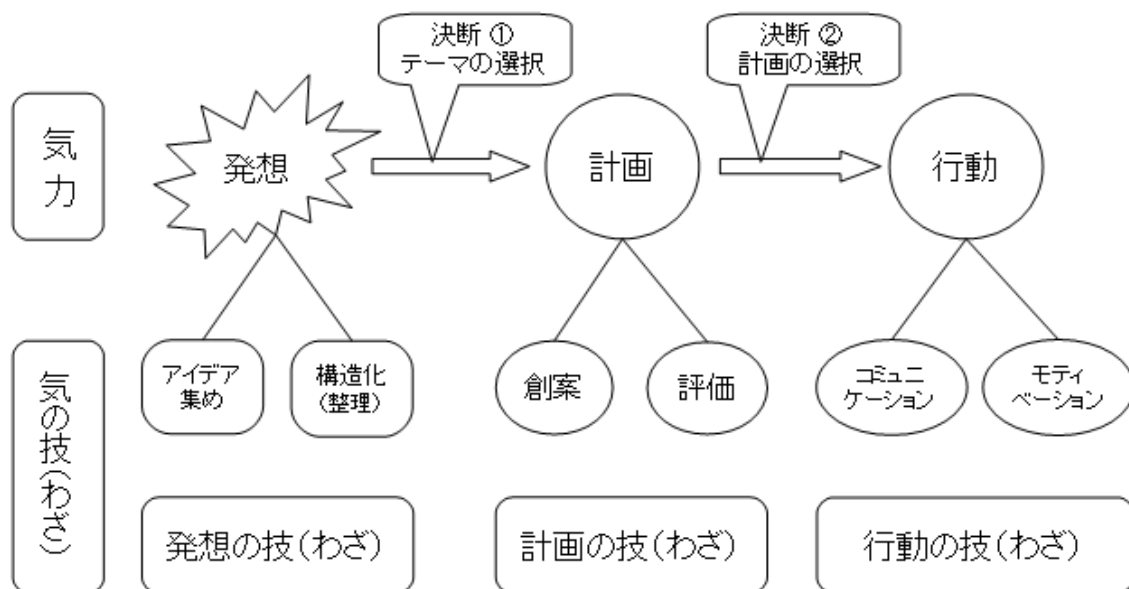
さて次に挙げた元手は「異力」である。この異力なる言葉は広辞苑を引いても見当たらない。苦勞した結果の私の造語である。この意味は一言でいえば広い意味での「その人らしさ」である。これが生まれる要因は、第一に両親さらには祖先から受け継いだDNAである。例えば音楽家の家に生まれると音楽家になる可能性は、そうでない場合より高いであろう。「その人らしさ」の生まれる第二の要因は、小さい時に身につけた習慣が挙げられる。それらは後にプラスに働くものもあれば、マイナスに働くものもある。一般的に言ってプラスに働くものとして例を挙げると、「責任感がある」、「嫌なことから逃げない」、「人を助けることを喜びと思う」、「集中力がある」、「誠実である」などなど枚挙にいとまがない。これらの逆（「責任感がない」など）もマイナスながら「その人らしさ」である。第三の「その人らしさ」の要因は、今日までに自分の中につくった/できた「価値観」である。これらの「その人らしさ」である「異力」の特徴は特別の努力なく自然に現れることである。プロフェッショナルを目指してする仕事に対して、異力は或る時はプラスに作用し、或る時はマイナスに作用する。プラスに働いたときは、異力は長所と認識され、マイナスに働いたときは短所と認識される。従って大切なことは己で異力の現れ方を制御することが肝要である。

次に残りの重要な元手である「技（わざ）」「知（知識）」「人（人脈）」について若干説明する。先ず「知（知識）」は二つに分けて考える。第一は、自分がプロフェッショナルを目指している領域での専門知識である。これ無くして仕事はできないので誰でも習得に時間を使う。第二の知識は仕事を上手に実行するための知識である。この知識は無くとも試行錯誤して仕事をこなすことができるので第一の知識ほどには習得に意識が向かないリスクがある。例えば組織をそのゴール達成の為にどう運営するかの「マネジメント」の知識がよい例である。更に例を挙げると、企業内で技術者として開発設計で良い仕事を続けると課長に昇進するケースは多くあるのではないだろうか。ここで新たに認識すべきことは、課長は「課」という小組織をマネジメントすることが仕事として加わること、そしてそのマネジメントなる仕事には技術者としての開発設計とは全く異なる知識が要求されることである。

次は「技（わざ）」である。知識との違いは、知識は「知っている」ことであり技（わざ）は「できる」ことである。ゴルフを例にとると、ドライバー、アイアン、パターの使い方はゴルフの教本を読めば数時間で手に入れることができるが、実際それらのクラブを振っても直ちにうまくゆくことは先ずない。即ち「知っている」と「出来る」ことは別ことである。実際仕事をするためには「出来る」ことが必須である。上記例として述べた「マネジメント」も同じことである。

技（わざ）を考える時、スポーツでの体を動かす技（わざ）は分かり易いが、頭を使う頭脳労働の場合はやや分かり難いので検討を加える。仕事には、それを実行するプロセスがある。ゴルフの場合のプロセスは次のようになる。一般的には、ティーグラウンドでクラブのドライバーを使い、次にフェアウェイに進み何本かのクラブのアイアンを使い、グリーンに到達するとクラブのパターを使って球をカップ（穴）に入れる。まとめるとゴルフコースがプロセスで、プロセスの過程で使うゴルフクラブが道具（技（わざ））である。これになぞらえて頭脳労働を考えると図3のようになる。プロセスは開始点の発想があり、そこからテーマを選択して計画作り評価をし、幾つかの案の中から一つの案を選択し、行動に入る。ゴルフにおけるゴルフクラブに相当するプロセスの各部分で使う技（わざ）（道具）があるはずである。頭脳労働の稽古をするには、これらの技（わざ）の内容を明確にしなければ稽古はできない。因みにスポーツにおいても戦略を考える仕事は頭脳労働でありこのプロセスを土台として考えることができる。

図3 「我々の仕事のプロセス」と「技（わざ）」



ここで最も根源的な技（わざ）を紹介する。物事を成就させるために色々な技（わざ）があるが、必ず「原因と結果の関係」（因果律）に依存している。何故なら仕事の「結果」は全てそれを実現するための下位の仕事が「原因」になっているからである。このことについて、17世紀のフランスの哲学者の著書「方法序説」の中で述べられていることを分かり易く記述すると図4に示す4つのステップとして表される。これを技（わざ）「分解と統合」と呼ぶことにする。この技（わざ）は他の全ての技（わざ）の根源になっている最も大切な基本的な技（わざ）である。（これ以外の具体的な技（わざ）の中味一つ一つについては説明が長くなるので本論文では省略する。）

図4 物事を成就する為の基本的プロセス

デカルト(17世紀)の方法序説をベースに

- 1 前提になる事柄を徹底的に疑い、「事実」を把握する
.....現状把握
- 2 「課題」を行動がとれる細かさまで「分解」する.....分解
- 3 「分解」して得られた「要素行動」を「統合」すると
「課題」が達成できることを確認する.....統合
- 4 一步離れて「全体を眺め」、見逃しがないか観察し、
・疑問がないかを考えてみる

次は「友（人脈）」である。ここで言う人脈とは、いわゆる営業の為の人脈などのような狭い意味での人脈ではない。山に隠遁して一人で自給自足の生活をする場合を除いて、どのような仕事をするにしても一人で仕事を完結することはできない。仕事を達成するための幅広い多くの協力者の助けを借りなければならない。ここで注意したいことは、この元手としての「友（人脈）」を拡大するためには、元手としてそれを育てる意識と、これらの人たちの力を借りる時には同時に自分が彼等の役に立つことをいつも念頭に置く必要がある。

バランスシートの左辺の元手の最後に「その他」と記しているが、上記に挙げた事項以外にも挙げてよいものがあるが（例えば、「人徳」）、ここでは私の体験から自分のコントロール下において、プロフェッショナルの仕事を実行するために直接有効なものに絞って記載した。

プロフェッショナルとしての個人のB/S（バランスシート）の右側に、プロフェッショナルな仕事をすることによって我々が期待することを挙げた。まずは、生活をするため収入である。地位・名声は結果として付随的に手に入る二次的なものです。そして次に仕事の結果味わえる「よろこび」である。例えば達成感だったり、人の役に立って「ありがとう」といわれたりしたときの喜びである。これら二つは、仕事の結果ではあるが自分が世の中に負っているといえる。仕事の結果が大きく上記の2点を超える場合は、それを「世の中への貢献（お役立ち）」と認識することとする。

これらの元手は異力を除いて互いに独立したのではなく因果関係のつながりがある。図5でそれらの関係を示す。

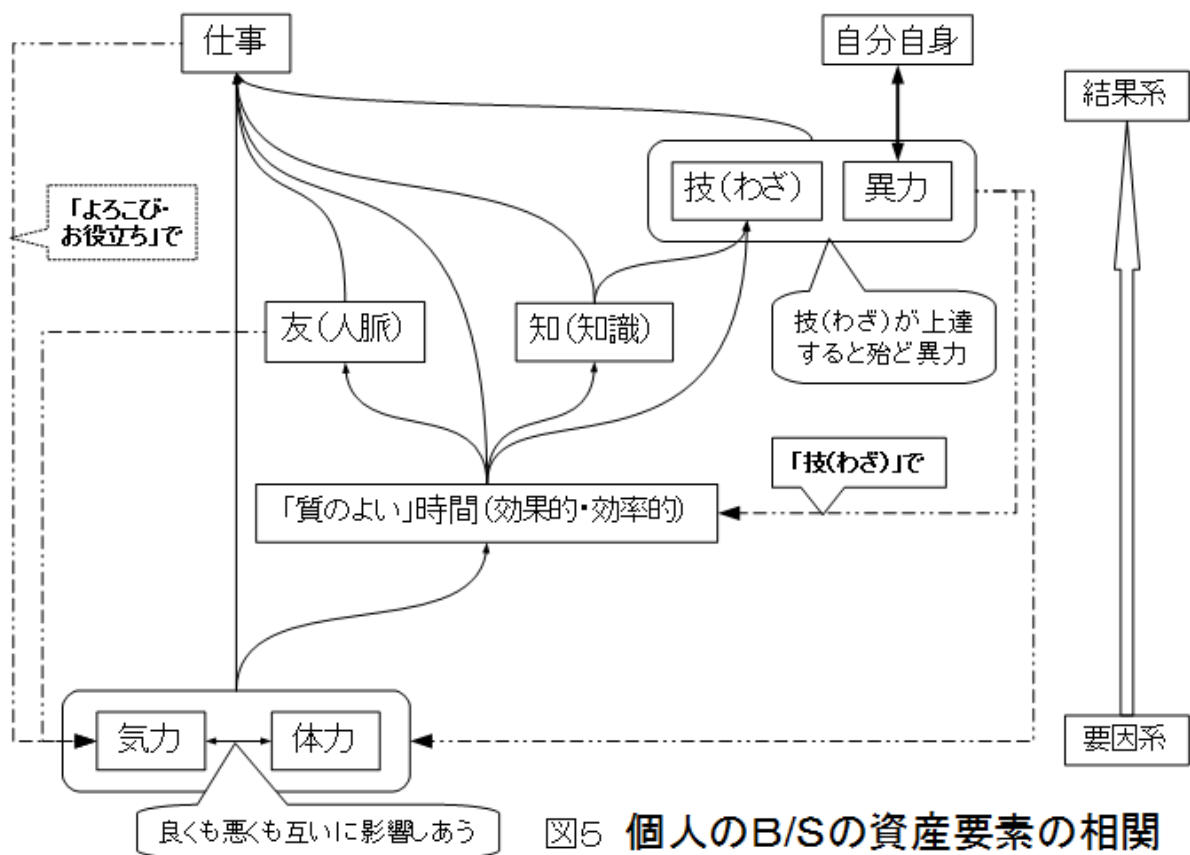


図5 個人のB/Sの資産要素の相関

バランスシートの最後の話として、プロフェッショナルな仕事をしてわれわれは右側の総和を拡大したいと思うのは自然ではないかと思う。その為にはバランスシートの左側の元手の拡大する事が必要になる。この観点から再度左側の要素を吟味すると次のようになる。 先ず「体力」は病気からの回復を除けば、20代を過ぎると下降傾向に入る。「気力」は仕事の成果に大きく影響を受けて安定しにくいもの。「時間」は毎日一日分（24時間）、一年に一年分（約9000時間）減少してゆく。「異力」（その人らしさ）はフル活用するが増えるという性質ではない。従ってB/Sの右側

を拡大するためには「技（わざ）」「知（知識）」「友（人脈）」を一生かけて拡大し続けることになる。

4 異力の凄さ

異力について一言追加したい。異力は「その人らしさ」であり、好むと好まざるとに拘わらず自然に現れる力である。しかし、ここで念頭におくべきことは上記に述べたように、異力は場合によって長所として現れたり、短所として現れたりするという二面性があることである。プロフェッショナルとして仕事をするときは勿論、長所として活用することになる。注意したいことは、短所は直すことはできないということである。何故なら、それがもし直ったらとしたら長所の元手たる「その人らしさ」が失われることになり、長所として活用できなくなる。従って、すべきことは、短所を直そうとする必要はなく、異力が短所として現れないようにコントロールすることである。例えば、組織のトップが非常に強力なリーダーシップ（らしきもの）を発揮している時、往々にして部下に対して細かい指示をし、更には部下に仕事を任せたといいながら肩越しに更に細かい指示を続けている状況があれば、結果、部下は育たないばかりか潰れてしまう可能性は大きい。即ち組織自体が大きな力を発揮できなくなる。リーダーの使命は組織の力を極大化するように自分の異力の現れ方をコントロールしつつ行動する必要がある。

5 技（わざ）と稽古

素晴らしい仕事をするためには異力をフル活用するが、それだけでは不十分な場合が殆どである。異力にそれを成し遂げさせる色々なサポートとなる技（わざ）が必要である。仏教語に因縁という言葉があるが、広辞苑には「因縁とはものごとの生ずる原因、因は直接的原因、縁は間接的条件」とある。これに当てはめると異力は「因」であり、技（わざ）は「縁」である。適切に研かれた技（わざ）があって、初めて異力は素晴らしい仕事をする確率が高まる。従って技（わざ）の稽古は必須である。

例えば、プロフェッショナルのサッカー選手は異力なる自身の身体運動能力を活用するが、具体的にはドリブル、シュート、パス、グループの技（わざ）を必死になって稽古する。稽古を怠ると直ちに結果は悪くなる。相撲、フィギュアスケート、歌舞伎役者、などなど枚挙にいとまがない。また色々な職人も持ち前の集中力・繊細さ・色彩感覚など（これらは「異力」の一部）を使って必要なその道の技（わざ）を研いている。

稽古を積んでその技（わざ）が無意識に繰り出せるようになると、それはほぼ異力の一部といえる状態である。プロフェッショナルにとって技（わざ）の稽古には終わりはない。日本には「極める」という言葉があるが、稽古は一生続き終わりはないといえる。勿論、運動選手の場合、年齢を重ねて競技そのものが身体的限界を超えると、別の道（例えば監督など）での仕事に必要な技（わざ）の稽古となる。

6 サラリーマンのリスク

GDPの多くを生み出している産業を直接的に支えている人たちの大部分はサラリーマンではないだろうか。従って彼らこそプロフェッショナルであって欲しい。しかし彼らがプロフェッショナルであるためには少なくとも5つの根本的リスクを日々念頭に置きたい。

第1リスクは、自分の異力は何であるかを考えることを忘れてしまうこと。例えば、企業で働いていると納期、品質、問題解決や予算作成実行などにより、忙しい時間に追われる生活は珍しくなく、確り「自分らしさ（異力）」を見つめることなく年を重ねてゆく。結果、本当に自分に備わった発揮すべき能力（これが異力）を真剣に考えることも忘れてしまう恐れがある。

第2リスクは、プロフェッショナルな素晴らしい仕事をするために必要な技（わざ）は何であるかを明確に認識すべきことに気が付かないこと。特に頭脳労働は要注意である。当然、こなすべき仕事の領域の専門知識は手に入れるが、素晴らしい結果を出すためには、全く別の知識とその実践の技（わざ）が必要であることに鈍感となり勝ちであること。簡単な例を挙げると管理職のマネジメントの仕事がある。マネジメントとは何か。それを実行するための技（わざ）は何か。それらを明確に理解しないと技（わざ）として稽古できない。端的に表すと例えば、マネジメントMとは、 $M = \{P, O, S, D, C\}$ と表現できる。ここでPはPlanning（計画する）、OはOrganizing（組織体制の型をつくる）、SはStaffing（組織体制に人材を投入する）、DはDirecting（組織に対して目標を明確に示しコミュニケーションとモチベーションを行う）、CはControlling（仕事の成果が目標に向かって順調に進んでいるかチェックし、不都合があれば修正行動をPlanning、Organizing、Staffing、Directingに対して要求する）である。そしてそれぞれの機能にはそれぞれのツボがあり技（わざ）として身につける必要がある。

第3のリスクは、例えそれらの技（わざ）を明確に理解しても、スポーツ選手の真剣さをもって技（わざ）の稽古をしない恐れが大きい。その要因は、稽古しなくても毎月給与日には決まって給与が銀行口座に振り込まれ当面の生活には何ら支障を来さないからである。スポーツ選手の場合は稽古せず結果が悪くなければ直ちに降格となり、延いては収入は減り生活設計に大きなインパクトがある。それ以前に結果が悪いことに満足感が得られない。

第4のリスクは、体調管理が疎かになるリスクである。プロのスポーツ選手ではこれはあり得ない。体調を崩したり怪我をしたりすると直ちに仕事の結果に現れるからである。一方サラリーマンの場合は体調を崩して仕事が出来なくなっても長期に亘らない限り、月々給与日に給与が振り込まれるので生活のリスクを感じにくい。従って、重大な病気になるまでは体調管理に真剣に取り組まないリスクがある。

第5のリスクは、第3と第4のリスクについて確り認識出来たとしても行動を起こさない自分がいること。即ち己の成長を邪魔するのは他人（ひと）ではなく己自身である。この意味で「己の克服」が生涯のテーマとなる。

7 若者の自分探しの旅

ここで言う「自分探し」とは「プロフェッショナルになる原動力である自分の異力が何であるかを見つけること」である。簡単に言うと自分が本当に楽しめ一生続けられること/仕事を見つけることである。芸術家、スポーツ選手などは若いうちから自分の仕事はこれ！と分かる場合が多いが、一般の者は色々なことが或る程度できるが、これこそ自分の天職だ！と早くから分かることは少ない。異力が未だ自分の中に隠れていて表にはっきりと現れていない時間が長く続くことも少なくない。しかし自分はこんなことをしている時が楽しく没頭もするという状況に注意を向けていると、早晚、自分（異力）が姿を現す可能性が大きくなるので焦る必要はない。それ時までには、そのきっかけを作るため色々な事をやってみることが重要だ。企業の中でも色々な仕事があるので、サラリーマンも色々な部署を経験することは意味がある。その間、何の仕事をするにしても、その実行の仕方を自分が楽しめるように実行することが大切である。そして将来、自分（異力）が現れて天職を実行する時の為に必要な仕事をこなす技（わざ）を研きつづけることが重要であり、その過程での成功と失敗の両方を楽しみたい。特に失敗は技（わざ）の不足と未熟を気付かせてくれる大切な宝物である。

8 プロフェッショナルお父さんお母さん(Professional at Home)

プロフェッショナルの議論を家庭という場に当てはめて考えると人生に更なる膨らみを持たせることができる。家庭でのプロフェッショナルを考えると、プロフェッショナル夫、プロフェッショナル妻があり、更に子供が出来れば直ちにプロフェッショナルお父さん、プロフェッショナルお母さんが考えられる。ここではプロフェッショナルお父さん、プロフェッショナルお母さんについて考えを深めることとする。プロフェッショナルの第一条件は「仕事の結果が素晴らしい」ということであった。親として子供への仕事としては育児・よい習慣着け・教育などが挙げられるが、プロフェッショナルのB/Sで考えると理論的にはっきりする。即ち子供が世の中に巣立つ時までには、彼らのB/Sの左側の幾つかの要素が準備出来ている状態を作ることである。例えば具体的には左側の元手の内、特に「体力」「異力」「知（知力）」「友（人脈）」ではないだろうか。「体力」については家庭での適切な日々の食事と健康管理の実行、そしてその習慣を身に付けさせる。

次に「異力」。世の中に出て力を発揮する「異力」の中味は、第1にその子供の潜在的な能力である。従ってそれが何かをよく観察して、それを発揮させる環境を与えて伸ばすこと。次に、将来の異力の一部として人としてどうあるべきかを小さい時から広義の躰として身につけさせる。例えば、前向きな考え方をもたせる。家庭の中で使う言葉がいつも前向きだと、そういう考え方が子供にもついてゆき、逆に家庭内の言葉が後ろ向きの言葉が多いと明るいう子供には育ちにくいのではと心配される。また集中力・責任感・誠実・勤勉・嫌なことから逃げない・他人（ひと）を助けるよこびなどなど、世の中に旅発つ迄にしっかり身につけておくことと将来社会へ旅立ち仕事をする上で周囲の他人（ひと）の協力を得やすく大いなる力となる。これは人柄づくりと言えるのではないだろうか。子供たちのB/Sの重要な一部をつくることは、子供たちは10～20年後の世の中を担う人

材であること、そして彼らが充実した人生を歩みだすための礎を築くことと考えると、「10～20年後をきょう働く」ということができる。なんと価値ある仕事か。

9 人生3万日の旅(Professional at Total Life)

平均寿命が伸びている今や、健康な人生3万日（約85歳）は現実のことになっている。85歳までの人生の時間配分を表にしてみると表3のようになる。

表3 人生の時間配分

単位：千時間 () : %

年令	合計	睡眠	仕事	私的時間
0-23	201 (27)	67 (9)	—	134 (18)
24-60	324 (44)	95 (13)	Golden Hour 74 (10)	156 (21)
61-85	219 (29)	59 (8)	—	Platinum Hour 160 (21)
合計	745 (100)	221 (30)	74 (10)	450 (60)

(注)四捨五入の関係で合計欄に若干不整合あり

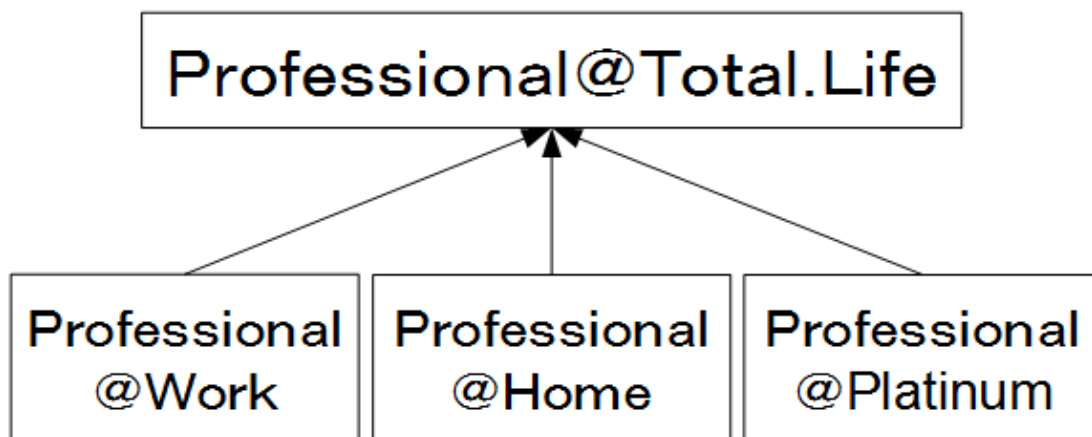
時間全体は74万時間強ある。この表で大学を卒業して（つい最近まで一般的だった）定年60歳までの時間は、睡眠時間を除くと残りは職場と家庭での時間となる。職場でのプロフェッショナルについては既に論じた。また家庭でのプロフェッショナルについては上記の Professional at Home で論じたので、ここでは60歳以降の時間につき論じてみる。表3で示したように定年後85歳まで元気であるとして、その時間全体は睡眠時間を差し引くと約16万時間ある。ここで2つのことに驚かされる。第一は大学を出て定年まで職場で働いた時間は人生の旬の時間故ゴールデン・アワー(Golden Hours)と名付けたが、それは85年人生7万4000時間の10%と小さいこと。第二は定年あと85歳までの睡眠時間を除いた時間は、このゴールデン・アワー(Golden Hours)の2倍以上あることである。この時間は一昔前まではシルバー時代と呼んでいたが、今や元気且つその時間の長さからプラチナ・アワー(Platinum Hours)と呼ぶことにする。そして人生全体の大きな部分

を占めるこの時間帯のプロフェッショナルを考え設計することの重要性を感じるわけである。先ずこの16万時間の使い方として三分法で考えるのも一考ではないか。3分の1を世の中との関わりを持って人の役に立つことをする時間に割り当てる。これでプロフェッショナルの第二条件を満たす。次の3分の1を家族との時間に充てる。家族との時間は心の幸せの基礎であり心の健康の元である。これはマズローの欲求5段階の第3段階部分の重要な要素に当たる。そして最後の3分の1を自分の好きなことをする事に充てる。これはプロフェッショナルの元手の「異力」が喜ぶことに使うので更に次元の高い心の健康の元となる。これはマズローの欲求5段階の最上位部分に相当する。これらにより長いプラチナ・アワーの日々の幸せが実現できるのではないかと思う。

またこのプラチナ・アワーは人生の第三楽章と呼びたい。ここで忘れてならないことは、結婚している場合は自分だけでなく夫婦二人の第三楽章であり双方にとって素晴らしいものにすることが大切である。結婚とは二人がそれぞれ自分の人生（命の全体）を賭けたプロジェクトであることを考えると当然といえる。

以上の検討により全人生のプロフェッショナルは仕事と家庭とプラチナ・アワーのプロフェッショナルから出来上がる（図6）。

図6 プロフェッショナル@全人生



そしてこの期間の最上位ゴールを考えてみると、シェイクスピアの戯曲に「終わりよければ全てよし」があるが、（やや欲張りではあるが）全人生のプロフェッショナルのゴールを「日々是好日」としたい。日々是好日は唐末の雲門禅師の言葉であり、その真意は別として、文字通り3万日の毎日がワクワクして好い日であれば、これに勝る幸せなことはないであろう。そしてそれは異力をしてプロフェッショナルな仕事をさせるための技（わざ）を身につければ理論的には可能である。そしてこの技（わざ）の取得は唯一実戦の場での稽古に掛かっており、それには終わりはない。その意味で結言として次の言葉でこの論文を締めくくりたい。

人生是大道也

参考文献

- | | | |
|----|--------------------------|--------------------------|
| 1) | ルネ・デカルト | 方法序説 |
| 2) | ウィリアム・デットマー | 論理思考プロセス |
| 3) | ジェームス・アレン | 原因と結果の法則 |
| 4) | 安岡正篤 | 知命と立命 |
| 5) | 宇野千代 | 天風先生座談 |
| 6) | A. H. マズロー | 人間の心理学 |
| 7) | H. Koontz, C. O' Donnell | Principles of Management |